

(注七)

『保元物語』『新院御経沈メノ事^附崩御ノ事』に、崇徳院を始めとする怨霊が後白河法皇邸に入ろうとして仏法に妨げられ、仕方なく清盛邸に入る。その後、

清盛次第ニ過分ニナリ 太政大臣ニ至リ 子息所従ニ至マ

テ 朝恩ニ肩ヲ并ル人ソ無 ヲコレル余ニ 院ノキリ人 中

御門ノ新大納言成親卿父子ヲ流シ失ヒ 西光父子カ首ヲ切り

撰録臣ヲ備前国へ移奉リ 終ハ院ヲ鳥羽殿へ押籠進スル

(半井本)

と、本返牒の2、7、次の行家の伊勢太神宮への願書の1(ならびに「治承物語」)に記されていることが「讃岐院ノ御崇」として記される。本稿ではこのことに言及していないが、筆者は、ここは『保元物語』が「治承物語」を参照して記したものと見るべきではないかと考えている。

(注八)

頼朝の旗揚げについては先学にも多くの論考があるが、筆者も、「源頼朝の旗揚げをめぐる」(『人文』平成三年八月)で考察を加えてみた。

(注九)

日本古典文学大系86『愚管抄』(昭和四二年一月)の同氏担当の補注から。

(注一〇)

富倉徳次郎が『平家物語研究』(昭和三九年一月)で「語り物」と「読み物」の二つの平家物語が別々に成立したと考えられたが、それに類したことになろうか(当道系諸本の場合は語られた場が

大きな要因になったのかも識れない)。

(注一一)

『平治物語』における悪源太雷化譚の作出と『保元物語』『平家物語』(『国文学研究』昭和五四年三月)から。

(注一二)

『平家物語』における頼朝と義経(『広島女学院大学国語国文学誌』昭和六二年一二月)。

(注一三)

『平家物語』と『平治物語』——交渉関係の吟味——(『国文学研究』昭和五三年六月)から。

(注一四)

注一二に同じ。

(注一五)

『古典遺産』(昭和三三年)

(平成九年五月六日受理)

養和二年三月平家美濃国墨俣川に馳向 十郎藏人行家は一門の長者たりと高倉宮の令旨には書下されたりしかとも兵衛佐と木曾冠者と二人の甥に権勢をとられてわつかに五百余騎の勢にて墨俣川のひかしのはたにひかへたり

源氏再興譚の以仁王の令旨は行家を「一門の長者」と認めていたというのである。しかし、これでは頼朝を中心とする源氏再興譚の錦の御旗とすることは出来まい。『愚管抄』の伝える「光能卿院ノ御氣色ヨミテ文覺トテアマリニ高雄ノ事ス、メスゴシテ伊豆ニ流サレタル上人」「シテ云ヤリタル旨」が以仁王の令旨に代わって錦の御旗となるのは止むを得ないことでもあったのではなからうか。

終わりに

本稿で、筆者は先ず「平家物語」諸本にある所謂覚明文書を手懸かりに「治承物語」の作者としての覚明の資格——どのような立場に立ち、どの程度知っていたかなど——を考察してみた。覚明が体験記を書いていたとすれば「その記録が『平家』創造に一役買ったであろう」とは梶原正昭氏の「転形期の人間像(一)太夫坊覚明——その生涯と文学——」^{〔注五〕}の言葉であるが、筆者の考えはその方向での一仮説ということになる。

次に、覚明文書が高倉宮以仁王(の令旨)を一貫して拠りどころとしていることから、筆者は「治承物語」も同じ立場に立つものと見做しているのであるが、それが「平家物語」に発展する契機として、後白河法皇の院

宣を手にした頼朝の平氏征討譚と合体したということを考えてみた。この合体、再編著ということは筆者の「平家物語」成立の核をなす考え方である。また、この節では、院宣による頼朝の旗揚げ説が当時の文献にどの程度に見えるかを調べ、且つ、この説の発生流布源を文覚と頼朝の周辺と考えた。

最後に、頼朝による平氏征討譚を生む勢いが『平治物語』の中に、その結び方にあることを指摘した。「平家物語」と『平治物語』が相似た世相を踏まえているということを前稿「(三)」で指摘したが、本稿ではその微妙に密着する具合に更に分け入ることになった。『平治物語』は『保元物語』と対になっているような体裁だが、「平家物語」の成立に極めて深い関係をもっていたのではなからうか。

〔注一〕 『鹿児島県立短期大学紀要人文・社会科学篇』(平成八年一二月)。

〔注二〕 拙稿『治承物語』をめぐる試考——延慶本『平家物語』の東大寺「伽藍ノ罰」関係記事——(一)『人文』昭和五十七年七月と(二)『鹿児島県立短期大学紀要人文・社会科学篇』昭和五九年一二月。

〔注三〕 注二参照。

〔注四〕 注一の拙稿。

〔注五〕 本稿の引用で特に断りのないものは延慶本によっている。

〔注六〕 水原一氏「義仲説話の形成」(『文学・語学』昭和三五年一二月)の受け取り方に従った。

一方、四部合戦状本などの、義経が承安年間の春に奥州へ下ったとする点や秀衡に当日の装いは仕立てて貰ったと語る点なども『平治物語』源氏再興譚を踏まえているように見える。

義経の兄卿公円成の討ち死に（本文省略）については日下氏が次のように整理されている。^(註二)

『平治』後日譚は、戦わずして命の失することを恐れた円成が五十騎の手勢を従えて夜襲を試み討死したと記すのに対し、延慶本は、行家と先陣を争う気持からただ一騎で夜の敵陣に潜入し、発見されて討死したとする（學P105。廻二P383。なお、名前を円全とす。四（長岡同）。また、南都本は行家・円成が策略によって夜襲を敢行し、円成のみが討死したと記す。（P315）。この場合も異伝の記載であろう。

又、頼朝の弟希義の死（本文省略）についても日下氏の整理を引用したい。^(註四)

後日譚中には、頼朝挙兵の際に平家から刺客を向けられて自害した頼朝の弟希義の話があるが、延慶本では彼は殺害されたこととなっており、刺客の名も、「蓮池次郎権守家光」に対して「蓮池次郎清経」、希義の異名も「けらの冠者」に対して「福田冠者」と異なる（學P103、94。廻二P218。長岡同。四「介良冠者」のみ『平治』と一致）。これも異伝を記したものであろう。

義経、円成の兄阿野法橋全成は、源氏再興譚で「悪禪師とて希代のあら者」と紹介され、「此事聞えしかは醍醐の悪禪師八条の卿君関々の固られ

ぬ先にとて負取てかけて下けり」と円成と一緒に鎌倉へ下ったことまでは記されているが、その後源平の合戦への関わりなど一切記されることがなく、「平家物語」諸本にも全く登場しない。

頼朝とも義経達とも母親を異にする蒲冠者範頼は、義経と異なり、生い立ちを記されることもなく、木曾義仲の追討から登場する（例文省略）が、その最期も又記されることがない。

このように『平治物語』源氏再興譚は明らかに『平治物語』の後日譚という枠の中で纏められているのである。『平治物語』諸本の中でも第四類本は源氏再興譚を記さないが、この節の冒頭に記したように、頼朝配流という『平治物語』諸本共通の記事の中で既に十分に後年の源氏再興が意識されているのである。第一類本や流布本の源氏再興譚は、『平治物語』の枠内での源氏再興の本格的な取り込みであったのだが、どちらかと言えば、義経達常盤腹の子供が中心になっていた。従って、この源氏再興譚の脇には、頼朝を中心とする源氏の平治弔い合戦があっておかしくない。

何回も述べるように源氏再興譚以前の『平治物語』諸本共通の部分で既に頼朝による源氏の再興、平治の合戦の弔い合戦が視野に入ってしまったのである。筆者の想像する院宣による頼朝蹶起の物語は、この『平治物語』が孕む作品世界に結びつくようにして纏まり、「治承物語」という意外な作品と合体してしまったことはなからうか。

最期に、『平治物語』源氏再興譚の中で、以仁王の令旨がどのように記されているかを見て、この節を終えることにしたい。

へ出しかは随付ぬ兵はなし

延慶本の「屋牧判官兼隆ヲ夜討ニスル事」「石橋山合戦事」「小壺坂合戦之事」「衣笠城合戦之事」「兵衛佐安房國へ落給事」「上総介弘経佐殿ノ許へ参事」に相当する部分であるが、当道系諸本では安房到着以後の記述はない。又、「小壺」の合戦では頼朝方の三浦氏が勝っていて、「所々の闘にうち負て」と一括している右の部分と「平家物語」諸本では微妙なずれがある。更に、右の安房到着以後の記述では上総介が先に頼朝に従ったような表現になっているが、四部合戦状本・延慶本・長門本・源平盛衰記では上総介は千葉介より後に駆け付けたことになっている。これらのことも『平治物語』の源氏再興譚と「平家物語」が深い関わりを保ちながら、別々の道を歩いたことを感じさせる。

源氏再興譚では頼朝と常盤の子供が主役である。次にその描かれ方を「平家物語」諸本と比べながら見てみよう。

源氏再興譚は『義経記』の母胎ではないかという気がするが、その中から「平家物語」に關係する、義経が頼朝の許に駆け付けるところ二箇所を引用する。

九郎冠者秀衡か宿所のひらいつみへうちこえて 兵衛佐の謀反しか
 く候也 暇申て坂東へうちこへん と宣へは秀衡対面し 定て御
 用に候はんすらん とて紺地の錦の直垂に紅裾濃の鍔金作の太刀を奉
 る 馬鞍あまた候へは何れにても と申せは烏黒なる馬の八寸はかり
 なるを十二疋立たる馬の中よりえらひとりて金覆輪の鞍置て乗てけり

佐藤三郎は公私認参らんとて留りぬ 弟四郎は供しけり

兵衛佐相模の大庭野に十万余騎陣取ておはしける所へ其勢八百騎はかり白旗さゝせて参られたり 何者そ さうなく錦の直垂着白旗のさしやう心えす との給へは 源九郎義経 と名乗申されければ 是ほと成人するまで見さりける事よ とてむかしをや思出られけん なみたくみ給ふ 八幡殿奥州後三年の合戦の時弟義光刑部丞にておはしけるか官を辞して弦袋を陣の座にとめて陸奥金沢城へ馳参せられたりければ八幡殿 故伊与守入道二度生かへり給へる心ちこそすれ とて鎧の袖をぬらされたり 先祖のむかしかたり今のやうにこそ覚れ と兵衛佐のたまひけるとかや

「平家物語」の頼朝、義経対面譚について武久堅氏は、その会見の場を浮島ヶ原とする源平闘諍録・南都本・源平盛衰記と黄瀬川畔とする四部合戦状本・延慶本・長門本とに分けることが出来る(注二)と指摘された。前者では維盛の率いた追討軍が逃げ帰った後義経が駆け付け、頼朝は義家の言葉に因んで父義朝が来られた気がすると言うところに特徴があり、後者はこれに対して、予定された合戦の前夜とするものが多く(四部合戦状本は逃げ帰った後)、頼朝の言葉も項羽の故事に因んで勇むところが加わり、更に義経に秀衡の反応を尋ねるに至るとの御指摘である。『平治物語』源氏再興譚は会見の場を大庭野として平家追討軍発向以前としている。しかも、会見した頼朝が義家の言葉を引き合いに出す点では源平闘諍録などに近く、

らの早馬の知らせの中で済ませる当道系諸本とに分かれるが、これも「平家物語」への再編集の中で生じる振幅・ぶれの現象として、この仮説の中で処理できる^(注一〇)ように思う。

『平治物語』の源氏再興譚との関連

『平治物語』は、義朝の遺児、常盤の子供と頼朝が助命されたことを記してその結びとしようとする。それは、平治の乱の処理の最後の記述なのであるが、中でも頼朝の配流はどうしても後年の彼の再起に言及しないでは済まなかったようである。従って、『平治物語』の結末部には頼朝による天下の平定の物語が孕まれていることに注目してみたい。

さて、『平治物語』諸本の中でも第一類本と流布本(第十一類本)系諸本は『平治物語』登場人物の後日譚を語っている。その世界は、『平治物語』の一つの結びとして、見事な纏まりをなしている。そこでは平氏の繁栄が記され、それに対して頼朝達、熱田大宮司の娘所生の子供と義経達、常盤所生の子供が戦いを挑み、遂に頼朝が天下を手にする、それを義経を中心に描いているのである。従って、これはあくまでも『平治物語』の結びの一つの姿に外ならないのであるが、これらの諸本の世界は明らかに「平家物語」の扱う時代を取り込んでいたのである。

この『平治物語』の源氏再興譚と「平家物語」との関係は、先学によって、『平治物語』と「平家物語」の成立の前後如何を論点に研究されて来た。筆者の関心もそれに重なるのであるが、本稿では、『平治物語』とし

ての独自の纏まりを保つものであることに留意しつつ、「平家物語」誕生の源を探るといふ方向で「平治物語」第一類本の源氏再興譚に即して考察を加えてみたい。

最初に取り上げるのは次の清盛の繁栄である。

抑保元に為義誅せられ平治に義朝誅せられしより以来平家の一門繁昌す わか身は太政大臣にあがり子息近衛の大將にあひならび親類の昇進思さまにて卿相雲客六十余人なりき 仁安二年十一月清盛病にをかされて年五十一にて出家して法名浄海と改む 兵庫に経島を築て諸国運送の船をたすけ福原に宿所をかまへて大略任国也

右の箇所の冒頭から「法名浄海と改む」までの部分について、日下力氏は『平家物語』の投影が、かなり高い確度をもって指摘できる^(注一一)と述べられている。確かにこのところは「平家物語」諸本の「清盛繁昌之事」「清盛ノ子息達官途成事」に類似の表現がある。しかし、「卿相雲客六十余人なり」と「仁安二年」とは一致する「平家物語」諸本を見ない。このことは、この部分と「平家物語」諸本とが或る時点で別れて、以後、別々の道を辿ったことを語っている。「兵庫に」以下の文の、経島を築いたことは該当部が欠巻の諸本を除く、すべての「平家物語」にあるが、清盛が福原に住んでいたことは「平家物語」諸本では曖昧にされている。

治承四年の秋八月十七日兵衛佐頼朝伊豆の目代和泉判官兼高を夜討にせしより以来石橋山の合戦小壺衣笠所々の闘にうち負て安房上総へわたり上総介以下なひかぬ者なし 下総へこえて千葉介を召具し武蔵国

た、かふに佐々木四郎後左衛門尉以下命をおしますた、かふあひたに 佐のかれてとひの次郎一人をくして舢艫にのりて安房國をさしてわたるに 御浦の住人等か佐をたすけにむかふに 畠山庄司左衛門・稲木三郎等か大庭の三郎にくは、りてゆくみちにあひては、た、かひて 館にひきこもりたるを庄司二郎等翌日にをそへり 壮士かこみをのかる、船中にして佐の渡海にあひぬ 命の義によりてかるからんことをなけきて上総権介にくは、りて 下総國をめくりて相模國鎌倉のたちにつきぬれば 関東帰伏せり

となつてゐる（『六代勝事記』がどうして頼朝の挙兵を養和年記の中で記すのか詳らかにし得ない）。

『六代勝事記』の記事の特色の一つは、以仁王事件との繋がりが、南都焼失にも頼朝挙兵にも全く記されていないということである。当然のことながら、『六代勝事記』には筆者の考える「治承物語」的発想はない。

『六代勝事記』においては、頼朝が令旨で立ったか、院宣で立ったかは詳らかではない。しかし、義仲、行家との関係を見ると、

頼朝（中略） 甲斐信濃両國の源氏等をかたらひて謀叛をたくむ
時に佐木曾義仲行家以下餘勢を起して

のように頼朝が中心になって、義仲等の源氏を結集したという表現になっている。この点も筆者の考える「治承物語」と異なる。

挙兵した頼朝は石橋山の合戦に敗れるが、安房に渡って再起し、遂に関東を平定する。『六代勝事記』の前引の部分は、表現は異なるが、『愚管抄』

が言及するところでもある。但し、『玉葉』九月十一日条、『山槐記』十月七日条にも同様の経緯が記されているので、ここは都でもよく知られたことだったのであろう。猶、『六代勝事記』では引用部に続けて、志田三郎義広との「能毛の宮の原」の戦いが記されている。言うまでもなく関東の頼朝を中心にした源平合戦の伝承は、この『六代勝事記』・『愚管抄』の頼朝挙兵の劇をもっと具体的に語るものだったに違いない。その具体的な伝承を取捨選択して纏め上げたものが非当道系諸本の頼朝挙兵譚ということになるのではなからうか。

『六代勝事記』が直接、筆者の想像する関東の源平合戦の伝承に関わると云っている訳ではない。ただ筆者の想像する伝承を具体的な文献で例示するとすれば、『六代勝事記』の右に記して来た部分は、そこで記したように筆者の想像するものに通う点をもっていると言いたかったに過ぎないのである。

断わって置くが、この伝承が文献として纏められていたかどうかははっきりしない。しかし、「治承物語」が関東の、ある頼朝を中心にした源平合戦の伝承に出会って、それを取り込み、それに取り込まれる、その渦中から「平家物語」が誕生するという仮説が、最も旨く「平家物語」成立の疑問点に答え得るのではなからうか。「治承物語」の全面的見直しという過程を経て、治承から養和・寿永・元暦・文治に至る時代を扱う「平家物語」という作品になったと筆者は考えたい。

「平家物語」諸本は、頼朝挙兵譚の詳しい非当道系諸本と、大庭景親か

ことは間違いない。「但コレハヒガ事ナリ」以下は慈円が追求して得た真相に外なるまい。赤松俊秀は「慈円が愚管抄のなかでこのような所伝を明確に否認したことは、かれが愚管抄を著わす以前に平家物語が成立しており、その記事の真偽について、慈円が批判をしたことを示すものである」と述べたが、光頼が文覚を使者として頼朝に言つて遣つたということが「平家物語」の記すような経緯を述べたものなのかどうかははっきりしない。

頼朝が院宣で平氏を討つたということを記す歴史資料としては『尊卑分脈』の爲義に始まる「源氏系図」がある。その頼朝に「平治乱時配流伊豆國 治承三蒙院宣追討平家一類了」と注記があり、「蒙院宣」と記されている。但し、「治承三」は以仁王事件の前年であり、何か誤りがあるのではないかと考える。

軍記では慈光寺本『承久記』に、

雖然相國ノ運命モ漸末ニ成シカハ 嫡子小松内大臣重盛公モ薨シ給フ

間 相國惡行日來ニ超過スル間 源氏又依院宣 前右兵衛佐頼朝ハ坂

東ヨリ打テ上リ 木曾二郎義仲北國ヨリ責上テ 無程平家ハ没落ス

とある（古活字本も「治承四年秋八月のすへ平家追討すべき由院宣を賜り」となっている）。慈光寺本の場合、頼朝と義仲が対になっているので「令旨」の方が宜さそうだが、「院宣」である。猶、「相國ノ運命モ漸末ニ成シカハ嫡子小松内大臣重盛公モ薨シ給フ」は「平家物語」の文覚の言葉を思わせて、興味深い。

平治物語諸本では流布本に、「文覚上人の勸によつて後白河法皇の院宣をたまはり」とあるが、こちらは「平家物語」の影響を受けたものと見るべきであろう。

右が管見の院宣によつて頼朝が挙兵したとする記事である。『愚管抄』に前引の文章があり、寛喜二（一一三〇）年から仁治元（一一四〇）年の間に成立したのではないかと見られている慈光寺本『承久記』にも院宣によるという語句があることからすれば、承久の乱（一一二一年）前後から中世前期軍記の成立記にかけて、頼朝が院宣によつて挙兵したという説があったことは確かである。

右の院宣による挙兵説で最も詳しく、興味深いのは「愚管抄」の説である。光能が文覚を使者として法皇の意向を伝えたいのは、「愚管抄」によれば文覚の作りごとだったというのだが、この話を広めたのは当の文覚よりも、それを信じた頼朝の周辺ではないかと考える。そのように考えることがゆるされるなら、法皇の院宣拜受説は頼朝の挙兵譚を伴っていたと考えて宜いのではないだろうか。つまり、筆者は関東に「治承物語」とは異なる、文覚・頼朝中心の源平合戦の伝承があったのではないかと考えてみたいのである。

『六代勝事記』の頼朝挙兵の部分は、

養和元年^{辛丑}伊豆國の流人前右兵衛権佐源朝臣頼朝^{左馬頭}者清和の後胤

左馬頭義朝^{贈大}の男也 甲斐信濃兩國の源氏等をかたらひて謀叛をた

くむに 大庭の三郎平家の重恩を報する心さし不淺 石橋の山にせめ

高倉宮以仁王の令旨と後白河法皇の院宣

行家が以仁王の令旨を伝え、その令旨に應じて頼朝以下の源氏が蹶起したということは『吾妻鏡』も記す有名な話である。覚明文書の中でこのことはどう記されているであろうか。

行家は大神宮への願書（覚明文書）の中で、「正六位上源朝臣行家去_レ治承之比蒙_{ルニ}最勝親王ノ勅_ヲ」と記している。又、前節に引用したように「行家爲_ニ防_ル朝敵_下向_{シテ}東国_ニ頼朝ノ臣_ト相共_ニ」とも出て来るので、頼朝も行家が貰った「最勝親王ノ勅」に應じたものという捉え方になっていよう。義仲も山門への牒状（覚明文書）の中で「翌日_ニ青鳥飛_ヒ来_リ令旨密_ニ通_{シテ}義仲有_リ可急参_ス之催_シ」と記している（四部合戦状本や当道系諸本などは別文となっているが、「令旨」という語もあり、趣旨は変わらない）、やはり、以仁王に應じての挙兵という姿勢である。

右のように覚明文書においては行家も頼朝も義仲も以仁王の令旨に應じたという立場をとっている。ところが、周知のように「平家物語」諸本において、頼朝は確かに以仁王の令旨を受け取っているが、彼が蹶起したのは令旨によってではなく、後白河法皇の院宣を手にしてということになっている。^(注八)

この「平家物語」諸本に出て来る法皇の院宣は覚明文書には全然出て来ない。筆者は「治承物語」を覚明の手になるものと考えるので、院宣による頼朝の蹶起という趣向は「治承物語」には無かったと考える。以仁王側に立った源氏の中で頼朝だけが院宣を受けて蹶起したとするのは、頼朝の

権威付けであり、彼が源平の合戦の覇者という見方を表明したものに外ならないだろう。頼朝が覇者ということになれば、物語は治承四年八月十七日の頼朝の挙兵から元暦二（一一八五）年三月二十四日の壇浦での平家軍の潰滅までが一応中核ということになるか。とすれば、それを扱う軍記の名称として「治承物語」を使うことは許されまいだろう。なぜなら、治承年間には十一箇月、治承後が三年七箇月ということだし、清盛が生きていたのは頼朝の挙兵後、僅か六箇月間のことに過ぎないからである。

右のようなことから、筆者は院宣による頼朝の蹶起という趣向が「平家物語」の誕生となったと考えるのだが、この院宣による頼朝の挙兵説の流布の具合を以下に追ってみた。

この問題で最も有名なものは『愚管抄』の次の記事である。

又光能卿院ノ御氣色ヲミテ文覺トテアマリニ高雄ノ事ス、メスゴシテ伊豆ニナガサレタル上人アリキ ソレシテ云ヤリタル旨モ有ケルトトカヤ 但コレハヒガ事ナリ

文覺上覺千覺トテグシテアルヒジリ流サレタリケル中四年同ジ伊豆國ニテ朝夕ニ頼朝ニ馴タリケル ソノ文覺サカシキ事ドモヲ仰モナケレドモ上下ノ御^{本ノマ}内ヲサグリツヽイタリケルナリ

この記事は、「ヒガ事」と真相とで構成されている。藤原光能が文覺を使いとして「院ノ御氣色」を頼朝に伝えたという「ヒガ事」は『愚管抄』の書き振りからすると慈円の耳にした話かと思われる。法皇の側が頼朝に積極的に働きかけたという話が『愚管抄』執筆の頃、慈円の周辺にあった

爰^ニ頃年之間平相國^{ト云アリ} 管領^{シテ}四海^ヲ而令惱乱万民 是^レ既^ニ仏
法ノ讎皇法ノ敵也

とあるように、清盛は王法仏法の敵と覚明に一方的に極め付けられているのである。

右のように興福寺からの返牒は「平家物語」の冒頭から一門の栄達までの部分と、治承三年の清盛の革命以後の「治承ノ合戦」の前夜とについて、清盛を弾劾する口調で、簡略ながら、言及していた。^(七七)

しかし、覚明文書の言及していることは以上に止まっていない。先に引いた行家の伊勢太神宮への願書には次のような記事もある。

- 1 安元年^ニ以終^ニ不^シ蒙指^{セル}勅定^ラ正一位権大納言藤原朝臣成親
并^ニ同息男等^於處^シ遠流^ニ稱^テ同意之輩^ト院中近習ノ上下諸人其数令
殺害^セ其身^ヲ或^ハ配流^シ遠近^ニ

- 2 以^テ左少弁行隆^ヲ恣^ニ構^テ漏宣^ヲ或^ハ天台山^ニ制^シ与^力或^ハ仰^テ護国^ノ司^ニ
集^テ軍兵^ヲ

- 3 行家為^ニ防^ムカ朝敵^ヲ下向^{シテ}東国^ニ頼朝^ノ朝臣^ト相共^ニ誘源氏^ノ子孫^ヲ且^ハ
催^テ相傳所^ヲ從^ラ所^ニ企^ル於^上洛^ヲ如^案ノ任^テ意^ニ東海東山^ノ諸国^已ニ合同
意畢

- 4 如風聞^ノ者自大^ニ神宮放^キ鏑^ヲ 入道其身^已ニ没^セ世^利

5 爰^ニ行家帰參^テ於^王城^ニ奉護^於王尊^ヲ於^テ頼朝^ハ者東州之邊堺^ニ輝^ス西
洛^ノ朝威^ヲ

1は所謂鹿谷の謀議事件である。「新大納言召取事」など「平家物語」諸本ではこも二十章段（延慶本で）に関連する記事が膨らんでいる。

2は以仁王事件の一齣である。行隆執筆の山門への院宣は延慶本の明雲座主宛の院宣（長門本・源平盛衰記にもあるが、別文）、延慶本・源平盛衰記にある山門宛のその二つ（三種類）が「平家物語」諸本にある。猶「仰^テ護国^ノ司^ニ集^テ軍兵^ヲ」ということも「平家物語」諸本に該当する記事がない。興味深いのは、信濃前司行長の父かと目されている行隆が、「治承ノ合戦」の時代、覚明と対立する平家方に属していたことである。

3と5にはこの時点での源氏の勢力が記されている。行家の願書なので彼を中心にした書き振りになっているが、「平家物語」諸本での行家の影は薄い。

4には清盛の死が記されている。しかし、「自大^ニ神宮放^キ鏑^ヲ」ということとは全然「平家物語」諸本には出て来ない。

右に記して来たような覚明文書は、覚明が、清盛の栄華とその悪行による平氏の滅び——以仁王の令旨を奉じて蹶起した源氏の頼政、頼朝、義仲によって都落ちする辺りまでを描く「治承物語」の作者に相応しいことを語っていると考える。

3と5の清盛の子や孫、一門の栄達は、「平家物語」諸本の「清盛ノ子息達官途成事」に關係する。「清盛ノ子息達官途成事」は重盛と宗盛が左右の近衛府の大将を占めたことを中心に、一門の栄達振りを畳みかけている。「平家物語」は近衛の大将を独占したことを反平家の動きに絡めて、牒状の単なる「統領九州進退百司皆為奴婢僕従」という露骨な批判とは次元を異にするところがある。

4の娘達の幸福も「平家物語」諸本にある「八人ノ娘達之事」に關係している。返牒は建礼門院と白河殿という平家の繁栄に最も深く関わった女性だけを挙げている。「平家物語」諸本では八人の娘全員が紹介されているが、何故か逸話付きで詳しく紹介されるのは桜町中納言成範の北の方であつた娘である。

6の部分が引用部では最も長いが、「平家物語」諸本では、「禿童」の逸話以外に直接關係する記事はない。猶、「禿童」の逸話は、牒状に記されている、批判を許さない清盛の姿勢の上に作られたもののように見える。それは先述の「闇打事」の牒状の記事に対する關係に類似する。「奪代、相傳之家領」ということについては、白河殿が摂関家の莊園を預るといふ有名な記事が『愚管抄』にあるが、「平家物語」諸本には出て来ない。

7は治承三年の清盛の無血革命事件である。この事件は「平家物語」諸本にある木曾義仲の山門への牒状（覚明の文書の一つ）の具体的に挙げられた平家の悪行の第一となつてはいるだけでなく、延慶本・長門本・源平盛衰記にある二つの覚明文書——源行家の伊勢太神宮への願書、義仲の白山

への願書でも同様の扱いとなつてはいる。その中でもっとも詳しいのは伊勢太神宮への願書で、次のようになつてはいる。

治承三年ノ仲冬ニ除目ニ稱シテ不ト叶ハ閔白大臣ヲ令配流指セル無咎智臣前ノ大相国以下四十余人ヲ處罪科ニ或ハ今上聖主ノ奪テ位ヲ讓リ謀臣之孫ニ或ハ本新天皇ヲ込テ樓ニ己ニ留於理政ヲ

右の伊勢太神宮への願書に記されている事柄を描くところを「平家物語」から挙げると、「太政入道朝家ヲ可奉恨之由事」「院ヨリ入道ノ許ヘ静憲法印被遣事」「入道卿相雲客四十余人解官事」「師長尾張國ヘ被流給事付師長尾張國ニ遣事」「左少弁行隆事」「法皇ヲ鳥羽ニ押籠奉ル事」「静憲法印法皇ノ御許ニ詣事」「内裏ヨリ鳥羽殿ヘ御書有事」「明雲僧正天台座主ニ還補事」「法皇ノ御棲幽ナル事」「法皇鳥羽殿ニテ送月日坐事」「春宮御讓ヲ受御事」の十二章段程になる（猶、右には「左少弁行隆事」「明雲僧正天台座主ニ還補事」という逆の（目出度い）記事も紛れ込んでいる）。これらの章段は「大地震事」と「京中ニ旋風吹事」とに挿まれていて一纏まりをなしてい、それが天変地異に画されながら、次の段階へ高まって行くという構成をなしている。覚明が重視するに至つたこの事件は「平家物語」諸本でもこのように詳しく描かれてはいるのである。

8の「判逆之甚キト誠ニ絶タリ古今ニ」という表現は「平家物語」冒頭の「間近ク大政大臣平清盛入道法名浄海ト申シケル人ノ有様傳承コソ心モ詞モ及ハレネ」に趣旨で一致していよう。「平家物語」諸本にある覚明文書「新八幡宮願書事」にも

1 于親父忠盛朝臣聽昇殿之時都鄙老少皆惜蓬壺之瑕瑾内外英豪各泣マ馬臺之籤文ニ 忠盛雖刷^{フト}青雲之翅^ヲ世人猶輕ス白屋之種^ヲ 惜名之青侍無臨^{コト}其家ニ

2 去^シ平治元年太上天皇感一戰之功授^メ不次之賞^ヲ以降高昇相國ニ兼賜^ル兵杖^ヲ

3 男子或忝^シ台階^ヲ或列^ル羽林ニ

4 女子或備^リ中宮職ニ或ハ蒙^ル准后宣^ヲ

5 群弟庶子皆歩^ミ棘路其孫彼甥悉割^ク竹符^ヲ 加之統領^シ九州^ヲ進退^{シテ}百司^ヲ皆為^ス奴婢僕從^ト

6 一毛違^ヘ心則雖^{云ト}王侯^ノ片言逆^レ耳亦雖^云公卿^ト擲^之 是以若^ハ為延^カ一旦之身命^ヲ若欲遁^カ片時之陵辱^ヲ万乘聖主猶成^シ面展之嬌^ヲ重代家君還致^ス膝行之礼 雖奪^ト代々相傳之家領上宰^モ恐而卷舌^ヲ雖取宮々相承之庄園^ヲ憚^テ權威^ニ而無^シ言^{コト}

7 去年冬十一月追捕^シ太上皇之隙^ヲ押^シ流^ス博陸侯之身

8 判逆之甚^キト誠^ニ絶^テリ古今^ニ

この返牒は、この辺りが欠巻となっている源平闘諍録・南都本・屋代本を除く諸本にあり、基本的なところは同文と言って宜いと考える。

引用する直前は清盛の祖父正盛についての記事である。「平家物語」諸本では「平家先祖之事」に相当する部分になるが、国司の下で檢非違所、厩別当職に任じられていたと、身分の低さを強調している。「平家物語」諸本において正盛は「諸國ノ受領タリト云ヘトモ未タ殿上ノ仙籍ヲ不聽^{サレ}」ぬ代として、その名前が一度出て来るだけである。

引用部1の忠盛の昇殿では、世間の人が批判的であったということに返牒は終始している。ここは「平家物語」諸本の「忠盛昇殿事^{付闍打事}」に係する部分である。「平家物語」諸本の忠盛には「殿上ノ交リヲタニ嫌ハレシ人」ということが付き纏っているが、「闍打事」はそれを語る逸話でもありながら、それ以上に武士の評価を高めた人物として描き、平氏の栄達への道を語る逸話に変容していると見られる。

2の清盛の栄達に対応する「平家物語」の章段は「清盛繁昌之事」である。覚明の返牒は清盛の出世の始まりが平治の乱にあったとしている。「平家物語」諸本も「龍ノ雲ニ昇ルヨリモ速カ」に昇進し出したのを乱後正三位に叙せられてからとしているので、この点では極めて近い。しかしその一方で、返牒が平治「一戦之功」でと保元の功を数えないのに対し、「平家物語」諸本は保元の功から数えて、「勲功一ニ非ス」とその妥当性を寧ろ印象付けているなどの違いがある。

一日に平清房等の率いる平家軍が三井寺に入って間もない頃でもあろうか。右のように覚明は「治承ノ合戦」そのものを眼の当たりにすることはなかった。しかし、その合戦の性格については、三井寺からの牒状に応ずる返牒を書きもしたので、明確すぎる程に理解していた。

三井寺からの牒状が要請して来たのは「仏法之破滅」を救って欲しいということであったが、清盛軍の攻撃を受けるに至った経緯は、その中で次のように記されていた(箇条書きにする)。

1 清盛が近年国威を盗み、朝制(政)を乱しているのを、三井寺は慨嘆していた。

2 五月十五日(源平盛衰記のみ十四日)の夜、以仁王が「不慮之難」を免れる為に入寺した。

3 院宣なるものが王を出すよう命じてきたが、拒否している。

4 清盛は仏法と皇(王)法を一時に破滅しようとして、三井寺を攻めようとしている。

牒状は所謂王法仏法相依の思想を冒頭に配した合力要請文であった。しかも、後半には、罪もない長者松殿基房を流された恨みを雪げと興福寺を煽動する文句まで付いていた。覚明がこの牒状を基軸として「治承ノ合戦」を受けとめたことは間違いない。

ところで、「平家物語」諸本の、その他の覚明文書(注六)にはこの「治承ノ合戦」に言及したのも出て来る。

宇治での合戦は、木曾義仲の山門への牒状(諸本の共通部分)で、以仁

王が三井寺に籠もり続けるのが難しくなって、南都に移ろうとする途上、宇治橋の辺りで合戦となり、東国の源氏等の援軍も全く無く、頼政の一族は打ち死にを遂げたというふう^(一)に記されている(周知のように王の死には全く言及しない)。南都の合戦については、延慶本・源平盛衰記・南都本と同じ牒状で、以仁王に味方した為に三井寺の坊舎から南都七大諸寺の堂塔僧坊に至るまで一字も残さず焼き払われたと記している(猶、平家が三井寺から南都七大諸寺まで焼いたという悪行の指摘は、延慶本・長門本・源平盛衰記にある義仲の白山への願書の中にもある)。そして、それに続けて、これら三本では「其中東大寺者聖武天皇ノ御願吾朝第一ノ奇特也」と東大寺盧遮那仏の焼失が悲嘆されている。

覚明文書は、(平家の捕捉の手から逃れた)以仁王に加担する側の清盛方との戦いという立場から書かれている。この捉え方が「治承ノ合戦」に始まることは言うまでもないが、延慶本・長門本・源平盛衰記に記されている源行家の伊勢大神宮への願書や「平家物語」諸本にある義仲の山門への牒状といった覚明文書でもこの点は変わらないのである。このような状況から、筆者は、反平家の勢力は以仁王(の令旨)を受けて蹶起したという立場を覚明は一貫して(「治承物語」の執筆においても)取ったろうと考えるのである。

さて、覚明は興福寺の、三井寺からの牒状に対する返牒を執筆したことから治承・寿永の戦乱に巻き込まれていくのであるが、この返牒は平家の現在に至るまでの歴史を次のように纏めていた(1〜8に分ける)。

「治承物語」をめぐる試考 (四)

「平家物語」への道など

橋口晋作

と考えた経緯を、筆者は、

「治承物語」の作者は、東大寺の大仏の靈力を信じ、且つ、清盛の死に様や資長の死に様をそれに結び付け得た人物であつたらう。

高倉宮以仁王が逃げこんだ園城寺から合力を求める牒状が来た時、

興福寺の返牒を執筆したと記されている覚明は、清盛を「平氏之糟糠

武家之塵芥」と貶し、激しい敵意を表している。従つて、平家軍に

よる南都の焼き討ちには許し難い恨みを抱き、強く仏罰を願つたこと

は想像に難くない。しかも、彼は後に、平家を都から追い落とす義仲

の手に属してもいる。「治承物語」の作者としてはこの大夫房覚明が

ふさわしいと考えるのであるがいかがであらうか。

と記した。前稿「(三二)」^(注四)や先学の研究を踏まえて、作者として仮定した覚

明の問題について、ここで更に考えてみたい。

覚明は前稿「(三二)」で扱つた「治承ノ合戦」を眼の当たりにすることはなかつた。宇治での高倉宮以仁王の一行と平家諸將の追討軍との合戦は南都の援軍が駆け付ける前に終わつてしまつていたし、平重衡率いる軍兵が興福寺・東大寺等を焼き払つた南都の合戦についても「入道安カラヌ事ニ思テイカニモシテ信救ヲ尋取テ誅セムトハカラルヽヨシ聞ヘケレハ南都モ都程近ケレハ始終叶ハシト思テ南都ヲ逃出ヘキヨシ思」^(注五)つたと記されてい(四部合戦状本と長門本には覚明の略伝は無い)、南都の合戦から落ち延びたとはなっていないので、重衡軍が攻めて来る前に逃亡したのであらう。或いは、覚明が南都を去つたのは、治承四(一一八〇)年十二月十

筆者は前稿「治承物語」をめぐる試考(三)——最近の研究の動向を踏

まえて^(注一)で「平家物語」の主な諸本に出て来る「治承ノ合戦」という表

現、『愚管抄』・『六代勝事記』の治承年間記事、『保元物語』・『平治物語』・

『承久記』の各古態本の序文(冒頭部)などから、「治承物語」という「平

家物語」の前身(旧稿^(注二)で想定した)の内容などを更に詰めてみようと思ひ

た。

本稿は、この前稿を踏まえ、そこから浮かび上がつて来た二三の問題点

について考察し、「治承物語」から「平家物語」へという方向で、「平家物

語」の成立を考えてみようとするものである。

大夫房覚明と「治承物語」

旧稿「治承物語」をめぐる試考(二)——延慶本「平家物語」の東

大寺「伽藍ノ罰」関係記事^(注三)——において、「治承物語」の作者を覚明